

平成 22 年 3 月 26 日現在

研究種目：基盤研究 (C)	
研究期間：2007～2008 年度	
課題番号：19592533	
研究課題名 (和文)	妊娠期・育児期の夫婦のセクシュアリティに関する研究
研究課題名 (英文)	Research on sexuality between partners during pregnancy and postnatal child rearing
研究代表者	玉熊 和子 秋田看護福祉大学看護福祉学部・看護学科・講師 研究者番号 70315547

研究成果の概要：妊娠期・育児期の夫婦に関わる看護者には、夫婦の関係性の継続および親役割遂行のためにも、その時期のセクシュアリティのニーズを把握し、性の健康を支援する役割があると考え本研究を実施した。その結果、妊娠期・育児期の夫婦のセクシュアリティの実態や、親役割遂行に影響を与える因子が明らかになり、妊娠期・育児期の夫婦の性の支援に必要な看護が示唆されたのでここに報告する。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成 19 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
平成 20 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学

キーワード：母性看護学、助産学、セクシュアリティ、性の健康、性の看護、妊娠期の性生活、育児期の性生活

## 1. 研究開始当初の背景

妊娠期・育児期においてもセクシュアリティの豊かさが求められるが、妊娠期・育児期のセクシュアリティに関する調査や、必要なケアや看護介入についての研究は未だ少ない(益田、2003)。しかし、妊娠・出産の心身社会的変化は夫婦間のセクシュアリティに少なからず影響を与えていると考えられ、夫婦の関係性の破綻のみならず、ひいては妊娠期・育児期における親役割の遂行に危機感を招くことになる。このことから、妊娠期・育

児期の女性に関わる看護者には、夫婦の関係性の継続および親役割遂行のためにも、その時期のセクシュアリティのニーズを把握し、「セクシュアル・ヘルス(性の健康)」(松本、2000)を支援する役割があると考えられる。妊娠期・育児期のセクシュアリティに関する学術的研究は従来取り組まれていない分野である。本研究は基礎的研究として、「周産期の女性の心身社会的変化が夫婦の性意識・性行動に及ぼす影響に関する研究」(若手研究(B))を実施した。その経過からは、

データを一般化し看護に応用するためには、①対象地区を拡大して調査を実施すること、②回収率を高め多くのデータを得ること、③得られた結果を妊娠期・育児期の夫婦に広く周知する方法を用いること等が課題としてあげられた。今回は、その研究方法・成果を発展させるものである。

## 2. 研究の目的

- (1) 妊娠期・育児期の夫婦のセクシュアリティの実態を明らかにする。
- (2) 妊娠期・育児期の夫婦のセクシュアリティが親役割遂行におよぼす影響を明らかにする。
- (3) 妊娠期・育児期の夫婦に必要な性の支援のための看護者の役割を検討する。

## 3. 研究の方法

### (1) 調査対象および調査期間

調査対象は妊娠 20 週以降から、3 歳児を持つ夫婦とした。日本全国 6ヶ所の市町村保健センター・産科施設等にて、マタニティ・セミナーや乳幼児健診および各種育児相談を受診した母親 1000 人に調査用紙を配布した。

調査期間は 2008 年 3 月～2008 年 9 月であった。

### (2) 調査方法

研究主旨等に同意の得られた母親に質問紙 2 部 (夫用・妻用) を直接配布し、後日郵送にて回収した。

### (3) 調査内容

- ①対象属性：年齢、職業の有無、出産経験別
- ②妊娠期のセクシュアリティ：性的欲求の変化、性交回数の変化およびその理由、性生活の満足度およびその理由、性感染症の予防の有無など
- ③出産後 1 年未満のセクシュアリティ：性的欲求の変化、性交の再開、性交回数の変化およびその理由、避妊の有無、性生活の満足度およびその理由など
- ④育児期 (出産後 1 年以上 4 年未満) のセクシュアリティ：性的欲求の変化、性生活の満足度およびその理由、避妊の有無など
- ⑤妊娠期・育児期の夫婦の性的関係：性生活の重要度、性的関心や欲求の一致度、性に関するコミュニケーションの有無、性行為の要求、パートナーとの将来の性的関係の程度予測など
- ⑥親役割の受容  
親役割受容についての質問 12 項目 (佐野、2002) を用いた。そのうち親であることの満足感や役割遂行を示す 9 項目を「親役割因子」、育児により社会参加への不満や妨げられていること示す 3 項目を「社会参加抑制因子」として用いた。

妊娠期の対象者には、上記調査内容の①・②・⑤・⑥について、出産後 1 年未満の対象者には①・②・③・⑤・⑥について、育児期の対象者には①・④・⑤・⑥についてそれぞれ質問した。

### (4) 分析

データの集計および解析には、SPSS 13.0J for widows を用いて記述集計・ $\chi^2$  検定・Fisher の直接確立法・ $t$  検定等を行った。

### (5) 倫理的配慮

調査用紙配布時に、研究目的・主旨およびプライバシーの確保、調査協力の任意性、不利益を受けない権利、成果公表などについて口頭および文書にて説明し同意を得た。また、夫婦個別に記載・返送することの了解を得た。また、本研究の実施に際して、秋田看護福祉大学倫理委員会の審査を受け、承認を得た。

### (6) 用語の定義

本研究では「セクシュアリティ」を、L. カーケンダール (1964) の提唱した概念を基本に、夫婦間の性的活動や関係性、日常生活における感情・行動のすべてを含む概念を基本概念とした。そして、「性的関係」を性行動に基づいた夫婦の関係性として用いた。

## 4. 研究成果

### (1) 対象の属性 (表 1)

回収率は 12.9% であり、そのうち父親 117 人 (妊娠期 66 人、出産後 1 年未満 16 人、育児期 35 人)、母親 141 人 (妊娠期 73 人、出産後 1 年未満 21 人、育児期 47 人) であった。平均年齢は父親 33.2 (±6.4) 歳 (範囲 22～50 歳)、母親 31.7 (±5.2) 歳 (範囲 19～46 歳) であった。平均結婚年数は父親 4.0 年 (範囲 0～15 年)、母親 4.1 年 (範囲 0～18 年) であり、1 年未満が父親母親ともに約 12.0% であった。

表 1 対象者の主な属性

		父親 (n=117)	母親 (n=141)
年齢	M (±SD) 歳	33.2 (±6.4)	31.7 (±5.2)
職業	人 (%) あり	112 (96.6)	44 (31.4)
	なし	4 (3.4)	96 (68.6)
出産経験別	人 (%)		
	初産	62 (53.0)	75 (53.2)
	経産	55 (47.0)	66 (46.8)
結婚年数	M (±SD) 年	4.0 (±3.4)	4.1 (±3.5)

### (2) 妊娠期のセクシュアリティ (表 2)

分析対象者 (妊娠期・出産後 1 年未満のもの) は 175 人、そのうち父親 81 人、母親 94 人であった。

性的欲求の変化では、父親の「高くなった・妊娠前と同じ」が 61.3% であり、母親よりも有意に多かった ( $p < 0.001$ )。

性交回数が増えた理由 (複数回答) として、父親では「胎児への影響が心配」55 人

(76.4%)、「(妻の)マイナートラブル」(41.7%)、「お互いの気遣い」25人(34.7%)、「流・早産の経験があり消極的」・「性的欲求・関心の低下」12人(16.7%)などであった。母親では「胎児への影響が心配」54人(60.7%)、「性的欲求・関心の低下」50人(56.2%)、「マイナートラブル」40人(44.9%)、「お互いの気遣い」27人(30.3%)、「腹部の増大」21人(23.6%)などであった。

表2 妊娠期のセクシュアリティ (%)

	父親	母親	検定※
<b>性的欲求の変化</b>	n=80	n=93	
高くなった・妊娠前と同じ	49 (61.2)	24 (25.8)	
低くなった・ほとんどない	31 (38.8)	69 (74.2)	**
<b>性交回数の変化</b>	n=81	n=94	
増えた・妊娠前と同じ	10 (12.3)	5 (5.3)	
減少した・ほとんどない	71 (87.7)	89 (94.7)	ns
<b>性生活の満足度</b>	n=70	n=84	
満足・どちらかといえば満足	29 (41.4)	48 (57.1)	
不満・どちらかといえば不満	41 (58.6)	36 (42.9)	ns
<b>性感染症予防のためのコンドームの使用</b>	n=66	n=72	
いつも・ときどき使用	33(50.0)	34(47.2)	
使用していない	33(50.0)	38(52.8)	ns

※Fisherの直接確立法、ns: no significance、\*\* : p<0.001

父親の性生活が「満足である」理由としては、「望む内容の性交ができていない」13人(44.9%)、「望む回数の性交がある」6人(20.7%)であり、「不満である」理由としては「性交の機会がほとんどない」19人(46.3%)、「望む内容の性交ができない」10人(24.4%)であった。母親の「満足である」理由としては、「望む内容の性交ができていないから」13人(35.1%)、「性交の機会がほとんどないから」9人(24.3%)であった。「不満である」理由としては「性交の機会がほとんどないから」8人(28.6%)、「望む内容の性交ができないから」7人(25.0%)であった。

(3) 出産後1年未満のセクシュアリティ(表3)

分析対象者は37人、そのうち父親16人、母親21人であった。

出産後1年未満の性的欲求・性交回数の変化等の項目において父親母親間で有意差は認められなかった。

調査時点において性交を再開していた父親は81.3%、母親95.2%であった。性交を再開した時期は、父親母親ともに産後3ヶ月までが約60%であり、以後産後6ヶ月まででは約80%であった。

表3 出産後1年未満のセクシュアリティ (%)

	父親	母親	検定※
<b>性的欲求の変化</b>	n=16	n=21	
高くなった・妊娠前と同じ	8 (50.0)	11 (52.4)	
低くなった・ほとんどない	8 (50.0)	10 (47.6)	ns
<b>性交回数の変化(妊娠前と比較)</b>	n=13	n=20	
増えた・妊娠前と同じ	2 (15.4)	6 (30.0)	
減少した・ほとんどない	11 (84.6)	14 (70.0)	ns
<b>性生活の満足度</b>	n=14	n=21	
満足・どちらかといえば満足	8 (57.1)	14 (66.7)	
不満・どちらかといえば不満	6 (42.9)	7 (33.3)	ns
<b>出産後の避妊の有無</b>	n=13	n=21	
いつも・ときどきあり	11 (84.6)	15 (71.4)	
避妊していない	2 (15.4)	6 (28.6)	ns

※Fisherの直接確立法、ns: no significance

出産後に性交を再開していないことや回数に影響している要因(複数回答)としては、父親では「子どもが気になる」「相手からの要求がない」がそれぞれ6人(46.2%)、「相手の愛情が自分に向いていない」3人(23.1%)であった。母親では「出産時の外傷・産後の出血」15人(75.0%)、「子どもが気になる」12人(60.0%)、「性的欲求・関心の低下」9人(45.0%)、「母乳のトラブル」4人(20.0%)であった。

父親の性生活が「満足である」理由としては、「望む内容の性交ができていない」5人(62.5%)、「不満である」理由としては「望む回数の性交がない」「性交の機会がほとんどない」が合わせて5人(83.3%)であった。母親の「満足である」理由としては「望む内容の性交ができていないから」6人(46.1%)、「不満である」理由としては「望む内容の性交ができないから」2人(28.6%)であった。

(4) 育児期のセクシュアリティ (表4)

分析対象者は82人、そのうち父親35人、母親47人であった。性的欲求の変化では、父親の「高くなった・妊娠前と同じ」が71.4%であり、母親よりも有意 (p<0.001) に多かった。

表4 育児期のセクシュアリティ (%)

	父親	母親	検定※
性的欲求の変化 (妊娠前と比較)	n=35	n=47	
高くなった・ 妊娠前と同じ	25 (71.4)	15 (31.9)	**
低くなった・ ほとんどない	10 (28.6)	32 (68.1)	
性生活の満足度	n=35	n=47	
満足・どちらか といえば満足	19 (54.3)	27 (57.4)	n.s
不満・どちらか といえば不満	16 (43.9)	20 (42.6)	
避妊の有無	n=35	n=47	
いつも・ ときどきあり	19 (54.3)	33 (70.2)	n.s
避妊していない	16 (45.7)	14 (29.8)	

※Fisherの直接確立法、ns: no significance、  
\*\* : p<0.001

父親の性生活が「満足である」理由としては、「望む内容の性交ができていない」8人 (42.1%)、「望む回数以上の性交がある」6人 (31.6%) であり、「不満である」理由としては「性交の機会がほとんどない」6人 (37.5%)、「望む内容の性交ができない」4人 (25.0%) であった。母親の「満足である」理由としては「望む内容の性交ができていないから」13人 (52.0%)、「不満である」理由としては望む内容の性交ができないから」6人 (30.0%)、「性交の機会がほとんどないから」5人 (25.0%) であった。

性交の回数や満足度に影響している要因 (複数回答) は、父親では「相手からの要求の有無」13人 (38.2%)、「自分の性的欲求・関心の変化」7人 (30.6%)、「相手の育児・日常生活の理解と協力」6人 (17.6%)、「相手の性的魅力の変化」5人 (14.7%) であった。母親では「自分の性的欲求・関心の変化」26人 (56.5%)、「相手からの要求の有無」13人 (28.3%)、「相手の育児・日常生活の理解と協力」12人 (26.1%)、「相手の性的魅力の変化」10人 (21.7%)、「相手への嫌悪感」6人 (13.0%) であった。

(5) 妊娠期・育児期の夫婦の性的関係 (表5、表6)

表5 妊娠期・育児期の夫婦の性的関係 (%)

	父親	母親	検定
性生活の重要度	n=111	n=136	
とても・どちらか かといえば重要	98 (88.3)	93 (68.4)	**
あまり・まったく 重要ではない	13 (11.7)	43 (31.6)	※ <sup>1</sup>
性的欲求・関心の一致	n=111	n=137	
とても・だいたい 合っている	81 (73.0)	96 (70.1)	ns
あまり・まったく 合わない	30 (27.0)	41 (29.9)	※ <sup>1</sup>
性的欲求や要望 について話し合い	n=111	n=136	
お互いに話し合う	70 (63.1)	77 (56.6)	ns
一方のみ伝える	13 (11.7)	17 (12.5)	※ <sup>2</sup>
話し合いはない	28 (25.2)	42 (30.9)	
性交の要求	n=112	n=135	
自分から	64 (57.1)	6 (4.4)	**
相手から	10 (8.9)	67 (49.6)	
お互いに	38 (33.9)	62 (45.9)	※ <sup>2</sup>

※<sup>1</sup>Fisherの直接確立法、※<sup>2</sup>χ<sup>2</sup>検定、ns: no significance、  
\*\* : p<0.001

表6 将来の性的関係の予測 (%)

	父親 (n=112)	母親 (n=137)
今まで (妊娠前) と 変わらない	50 (44.6)	59 (43.1)
妊娠・出産を機に 豊かになる	16 (14.3)	14 (10.2)
性的関心が減少し、 性的関係が減少する	23 (20.5)	39 (28.5)
性的関係とれず、お互 いに距離感が生じる	3 (2.7)	1 (0.7)
わからない	15 (13.4)	21 (15.3)
非回答	5 (3.2)	3 (2.2)

性生活の重要度では、父親の「とても・どちらかかといえば重要」が88.3%であり有意 (p<0.001) に多かった。性交の要求は父親から有意 (p<0.001) に多かった。

将来の性的関係については、父親母親ともに「今まで (妊娠前) と変わらない」、「性的関心が減少し性的関係が減少する」の順で多かった。

(6) 親役割の受容 (表7)

親役割の受容については、親役割因子9項目、社会参加抑制因子3項目の計12項目に対して、「とてもそう思う」から「まったくそう思わない」の4段階で回答を求め、それぞれ3~0点を付して因子別に合計得点を算出した。対象者全体の親役割因子得点の平均は、父親14.9 (±2.8) 点、母親15.0 (±2.5) 点であった。社会参加抑制因子得点の平均は父親2.9 (±1.6) 点、母親4.3 (±1.9) 点

であり母親の得点が有意 ( $p < 0.001$ ) に高かった。妊娠期・出産後1年未満・育児期のそれぞれの平均得点を比較しても母親の社会参加抑制因子得点が有意 ( $p < 0.001$ ) に高かった。

表7 親役割受容の因子別得点

		父親	母親	検定
全体	M (±SD)	n=105	n=132	
	親役割因子得点	14.9 (±2.8)	15.0 (±2.5)	ns
	社会参加抑制得点	2.9 (±1.6)	4.3 (±1.9)	**
妊娠期	M (±SD)	n=59	n=68	
	親役割因子得点	15.0 (±2.6)	14.7 (±2.6)	ns
	社会参加抑制得点	2.9 (±1.4)	3.9 (±1.7)	**
出産後1年未満	M (±SD)	n=14	n=20	
	親役割因子得点	14.6 (±4.1)	15.3 (±2.7)	ns
	社会参加抑制得点	2.5 (±1.2)	4.5 (±1.8)	**
育児期	M (±SD)	n=32	n=44	
	親役割因子得点	14.9 (±2.7)	15.2 (±2.1)	ns
	社会参加抑制得点	3.1 (±2.1)	4.7 (±2.1)	**

※Mann-WhitneyのU検定、ns: no significance、\*\* :  $p < 0.001$

### (7) 性的関係と親役割の受容

(表8-1、表8-2)

将来の性的関係と親役割の受容について、父親では性生活が重要であるとしたものの親役割因子得点が母親よりも有意 ( $p < 0.05$ ) に高かった。社会参加抑制因子得点では有意差は認められなかった。

母親では、性的欲求や関心が一致しているものの親役割因子得点が有意 ( $p < 0.05$ ) に高く、同様に社会参加抑制因子得点が有意 ( $p < 0.05$ ) に低かった。また、性的欲求・要望についてお互いに話し合う ( $p < 0.05$ ) としたものの社会参加抑制因子得点が有意に低かった。

### (8) 考察・まとめ

①妊娠期・育児期の夫婦のセクシュアリティ  
性的欲求の変化では、妊娠期に低下する父親は約3割であったが、半数以上は妊娠前と同じ性的欲求レベルであった。それは、出産後1年未満・育児期も同様であった。一方、母親では約7割が性的欲求レベルの低下もしくは消失傾向になり、育児期まで継続していた。金子ら(1995)が実施した1983年と1993年の比較調査とほぼ同様の結果を示していた。このことは、母親は妊娠という身体の生理的变化により性的欲求が減退するが、父親はその影響を受けないため性的欲求レベルが維持されるためと考えられた。本調査結果

表8-1 夫婦の性的関係と親役割の受容(父親)

		父親(n=105)	
		親役割因子得点 M (±SD)	社会参加抑制因子得点 M (±SD)
性生活の重要度 (とても・どちらかといえば)	重要である	15.9(±3.0)	2.9 (±1.6)
	(あまり・まったく) 重要でない	14.0(±1.9)	2.9 (±1.8)
			*
性的欲求・関心の一致度 (とても・だいたい)	合っている	15.0 (±2.8)	2.9 (±1.7)
	(あまり・まったく) 合わない	14.9 (±3.1)	2.9 (±1.5)
性的欲求・要望について	お互いに伝えあう	14.8 (±3.0)	3.0 (±1.6)
	一方のみ・話し合いなし	15.3 (±2.6)	2.7 (±1.6)
将来の性的関係の予測 妊娠・出産を機に豊かになる		16.1 (±2.1)	2.4 (±1.6)
	変化なし・関係性の減退他	14.7 (±3.0)	3.0 (±1.6)

※Mann-WhitneyのU検定、\* :  $p < 0.05$

表8-2 夫婦の性的関係と親役割の受容(母親)

		母親(n=132)	
		親役割因子得点 M (±SD)	社会参加抑制因子得点 M (±SD)
性生活の重要度 (とても・どちらかといえば)	重要である	15.2(±2.3)	4.2 (±1.8)
	(あまり・まったく) 重要でない	14.4 (±2.7)	4.4 (±2.0)
性的欲求・関心の一致度 (とても・だいたい)	合っている	15.4 (±2.3)	4.0 (±1.9)
	(あまり・まったく) 合わない	14.1 (±2.7)	4.7 (±1.7)
			*
性的欲求・要望について	お互いに伝えあう	15.2 (±2.1)	4.0 (±1.9)
	一方のみ・話し合いなし	14.7 (±2.8)	4.6 (±1.8)
			*
将来の性的関係の予測 妊娠・出産を機に豊かになる		15.9 (±1.9)	3.6 (±1.4)
	変化なし・関係性の減退他	14.9 (±2.5)	4.3 (±1.9)

※Mann-WhitneyのU検定、\* :  $p < 0.05$

からは、性的欲求レベルには男女差があること、また父親においては妊娠期・出産後1年未満・育児期によりレベルの高低に変化があ

ることが明らかになった。このことは、男性の性的欲求は直接的に妊娠・出産により影響を受けないけれども、女性の心身社会的変化や、夫・父親としての役割変化などの要因が強く影響していることが推測された。

妊娠期の性交回数の変化では、性的欲求レベルに関わらず男女ともに約 90%の父親母親が減少またはほとんどなくなったとしていた。前述の金子ら(1995)の調査結果では、妊娠中の性交回数について「多少減った」が約 70%であったことから、父親母親ともに性交の回避傾向が強くなっていることが推測された。合わせて性交回数への影響として男女ともに「胎児への影響」を主要因としてあげており、次いで「(妻の) マイナートラブル」「流・早産の心配」と妊娠中の母体への配慮が優先された結果であると考えられる。

性生活の満足度については、妊娠中は父親母親ともに差は認められなかった。出産後では、父親は「不満である」とし女性に比して多い傾向であったが明らかな差は認められなかった。妊娠期・育児期を通して、父親の満足度の理由としては、性交が「望む回数」「望む内容」であることが満足している理由であり、「性交の機会」や「望む回数」がないことが不満の理由であった。母親においては「性交の機会がほとんどない」が満足・不満のそれぞれの理由となっていた。また、「望む内容」ではないことが不満の理由でもあった。これらのことから、父親母親のそれぞれのニーズに実際の性生活が一致していないことが理解される。

出産後の性交の再開や回数に影響する要因からは、妊娠・出産による影響が直接的に心身両方に影響していることが考えられた。育児期における性交回数や満足度に影響している要因として、父親母親ともに自身の性的欲求・関心の変化が理由となっていたが、相手からの要求や日常生活の理解と協力度、性的魅力の変化など、相手との関係性の中で性的関係を捉えるようになっていた。

また、妊娠期の性感染症予防としてコンドームを使用している父親母親は約半数であり、育児期でも避妊しているのは約 50~70%であった。これらのことから妊娠期は性感染症予防の必要性を知らないこと、出産後は避妊の必要性の知識を持っていても行動に移さない・移せない状況、次回妊娠を予定していることが背景にあるためと推測された。

妊娠期・育児期の性的関係については、性生活を「重要である」とした男性が多く、女性では「重要ではない」が多く、男女差が認められた。このことは、妊娠・出産に伴う心身の生理的变化や、性的欲求・関心の減退が影響し、女性の性的関係に対する内的意向が示されていると考えられた。将来は今まで以上の性的関係性が予測されるとした夫婦は

約 60%であった。将来の性的関係については、30代から夫婦の性的問題を認識していることが多いと報告されている(安田、2007)。よって、本研究対象の年代である妊娠期・出産後育児期の夫婦に対して、性に関するコミュニケーションをとること、お互いのセクシュアリティや性の満足度を理解することへの援助が必要であると考えられた。

## ②夫婦の性的関係と親役割の受容

親役割の受容については、父親母親ともに同様な受け止め方であった。しかし、育児による社会参加への不満・行動制限については、佐野ら(2002)の結果と同様に明らかな男女差が認められた。女性は妊娠・出産・育児により、社会から離れることを余儀なくされ、慣れない育児に困惑し、親としての不適格さや行動の不自由さを抱えていることが原因と考えられた。

出産後育児期は、家族として夫婦として新たなステージを迎える時期であり、成熟期以降の良好なパートナーシップの構築において、性的関係を支援することは重要な課題である。本結果では、母親においては、「性的欲求・関心が一致している」「性的要望についてお互いに話合う」としたものがより社会参加への不満が少なかった。父親においては性生活を重要であるとしたものがより親役割を受容していた。性に関するコミュニケーションをとることが、相互理解を促し、欲求や要望の調整がなされ、引いては親役割の遂行に良い作用をもたらすことが示唆された。

## ③妊娠期・育児期の夫婦に必要な性の支援のための看護者の役割

性的関心が一致していること、性に関するコミュニケーションがあることが、パートナーとの将来の性的関係にも影響を与える(玉熊他、2008)。本結果においては、性的関心の一致や、性的要望の話し合いがある母親の方が親役割を受容し、育児による社会参加への不満・行動制限の認識が低かった。子どもの誕生後の夫婦の親密性は親役割の受容に肯定的に作用するばかりではない(宇都宮、2006)。よって、妊娠期・育児期の性の支援としては、夫婦がお互いの性的活動の変化や満足度を理解すること、母親の性のニーズや父親の思いをお互いに理解し夫婦間で調整しあうための援助が看護者には必要である。

## 《文献》

- ・益田早苗：性(セクシュアリティ)に関する看護の動向と傾向—文献からみた障害と性の看護に焦点をあてて、リハビリテーション看護研究 8、p6-12、2003。
- ・松本清一、宮原忍監修：セクシュアルヘルスの推進行動のための提言、財団法人日本性教育協会、2000。
- ・佐野和香、我部山キヨ子、池田浩子、他：

現在日本における父母の育児観とその影響因子に関する研究－1歳6ヶ月児の母親と父親の比較、母性衛生、43(2)、p387-394、2002.

- ・金子和子、大川玲子、島村忠義：妊娠中の性生活実態調査（第1報）10年前との比較－頻度を中心として、日本性科学学会雑誌第13巻、p8-14、1995.
- ・安田かつ子、細江容子：30～60代の有配偶者の性交回数にかかわる要因の検討、母性衛生第、47(4)、p667-674、2007.
- ・玉熊和子、益田早苗：妊娠期および産後育児期の夫婦間の性的関係に関する研究、日本性科学学会雑誌、26(1)、p46-55、2008.
- ・宇都宮博：どう支える？親になりきれない親－第46回日本母性衛生学術集会シンポジウム[3]より、母性衛生、46(4)、p487-489、2006.

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計1件)

- ①玉熊和子、益田早苗：妊娠期および産後育児期の夫婦間の性的関係に関する研究、日本性科学学会雑誌、査読有、26(1)、p46-55、2008.

[学会発表] (計2件)

- ①玉熊和子、益田早苗：周産期の男女のセクシュアリティに関する研究－夫婦間のセクシュアリティの比較－、第27回日本看護科学学会学術集会、2007年12月8日、東京国際フォーラム、東京都.
- ②玉熊和子、益田早苗、高橋佳子：妊娠期・育児期の父母の親役割の受容と自己実現のニーズに関する研究、第28回日本看護科学学会学術集会、2008年12月14日、福岡国際会議場、福岡市.

[その他]

- ①ホームページの開設

妊娠期・育児期のセクシュアリティに関する研究成果（玉熊、2006）を周知する目的にて平成19年11月より本研究独自のホームページを開設した。平成21年4月に所属先変更に伴い、ホームページのデータを更新し現在も開設中である。

(<http://www.chutan.ac.jp/guide/teacher/tosp.html>)

- ②小冊子の作成

平成19年には上記(1)の先行研究成果を基に、平成20年には2年間の研究成果をもとに「Think our Sexuality」という妊娠期・育児期の夫婦のためのセクシュアリティ小冊子を作成した。作成した小冊子は、全国の調査協力機関等に郵送配布した。

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

玉熊 和子 (70315547)

秋田看護福祉大学・看護福祉学部・講師

(2)研究分担者 (10315541)

益田 早苗

武蔵野大学・看護学部看護学科・教授

(3)連携研究者

高橋 佳子 (60325909)

青森中央短期大学・看護学科・講師